

Homework 12

ことばを科学する：人間の再発見（主題別科目：思索と言語）

2013 年度 2 学期

奥 聡

(A)

(省略)

(B)

添付の文書、杉本孝司(1998)『意味論 1 - 形式意味論 - 』（くろしお出版：pp.16-37）の中の「多義性と同義性」pp.16-24 を読んで、書かれていることと異なるものを 1 つ選びなさい。（指定部分以外は興味のある人は読んでみて）

- a. p.19 の(13)は 4 通りの解釈の可能性があるのに対して、(14)の解釈の可能性は 2 通りである
- b. 英語は、日本語のように漢字を使わないので、単語レベルでの多義性はほとんどない
- c. p.20 の(15)の文は、That man が母方のおじであり、this man が父方のおじである場合でも使える
- d. 意味が異なれば形式も異なる、という考え方がある
- e. p.20 の(16)で、最初の may を「許可」の意味で解釈した場合は、2 つ目の may も「許可」の意味で解釈しなければならない

(C)

添付の文書は、Chomsky が 1986 年にマナグアの中央アメリカ大学で行った連続講義『言語と知識 マナグア講義録』（産業図書）の「質疑応答」部分（pp.171-195）の日本語訳である。「質問」は聴講した学生からのもので、「答え」を述べているのが Chomsky。pp.178-188 を読んで、Chomsky が述べていることとは異なるものを 2 つ選びなさい。（該当箇所だけ読めば、答えられます。興味のある人は他の部分も読んでみて）

- a. ハトが飛ぶことを覚える時期が生物学的に限定されているのと同じように、人間の子どもが母語を身につける時期も生物学的に限定されていることはありうる
- b. 一般に科学学的知識は、実用的な活動を遂行する能力よりもずっと進んでいる
- c. 語学の教師が、現代言語学が何をしているのかに注意を払うことには無意味ではない
- d. 科学者の言うことは、実用的な価値があることが多いので、よく聞いてそれに従うのが賢明である
- e. 自ら学びたいと思うことは、どんなに方法論が悪くても学べる
- f. 人間の生存に直結しない数学的能力は、言語能力の発達の副産物であると推測できる
- g. 20 世紀初頭まで、多くの科学者は「分子」は説明の都合上便利な抽象的概念に過ぎず、それに対応するものが物理的に存在するとは考えていなかった
- h. 脳科学者は、人間の持つ言語や認識能力の物理的基盤を明らかにするために探求すべき抽象的な構造

基盤が何であるのかを、言語学者や心理学者に尋ねるべきである

i. 言語学は物理学のように、対象に対して直接的な実験をすることができないため、言語学者は解答を見つける努力をするためにずっと賢くなければならない

(D)

1. 杉本孝司(1998)『意味論 1 - 形式意味論 - 』（くろしお出版：pp.16-37）の中の「多義性と同義性」pp.16-24 を読んだ感想を自由に書きなさい。

2. チョムスキー『言語と知識 マナグア講義録』（産業図書）の pp.178-188 を読んだ感想を自由に書きなさい。